

日時

2022年8月27日(土)

会場

広島大学教育学部 K102 教室 (オンライン環境併設)

研究発表会 (13:40~14:55)

1. 13:40~13:55 (オンライン)

被服製作学習に対する意識と有用感の検討—大学生への調査から—

○富田 道子 広島都市学園大学子ども教育学部

2. 13:55~14:10 (オンライン)

家庭科における家族学習の実施状況の検討

—島根県の中学校の家庭科教員への意識調査を通して—

○鎌野 育代 島根大学教育学部

3. 14:10~14:25 (オンライン)

ICTを活用した高等学校家庭科「収納と物の管理」の授業実践とその効果

○井澤 妃那 山口大学教育学部 (学生)

西尾 幸一郎 山口大学教育学部

4. 14:25~14:40 (オンライン)

小学校家庭科と異文化理解教育を関連付けた授業実践とその効果

—日本とカナダをつなぐ遠隔教育の事例より—

○立石 生羽 山口大学教育学部 (学生)

西尾 幸一郎 山口大学教育学部

5. 14:40~14:55 (対面)

生徒の主体的な学びを引き出す「布を用いた製作」の授業実践

—地域素材とICTの活用—

○森田 美和 倉敷市立倉敷第一中学校

## 1 研究背景と目的

近年、コロナ禍による家計への影響が叫ばれるなか、ファストファッションの売り上げはアパレル業界で国内首位を維持し続けている。このような消費社会において被服製作の技能を必要とする場面は激減しており、平成21年(2009年)に告示された高等学校学習指導要領以降、多くの高等学校が履修する「家庭基礎」において被服製作が必修とされなくなったことも大学生の基礎縫い技術未定着の要因と推察する。

そうしたなか、教員養成大学の学生は、基礎縫い技能の習得を日常生活で活用できる機会があることから教育的意義として強く捉えられやすいが、ミシン縫いの技能の習得については製作物を学校・家庭生活で活かす機会があったとしても、各家庭におけるミシンの普及率を考えるとその意義は基礎縫いよりも見出しにくいように思われる。先行研究(高木,2005;竹吉・多々納,2005;池崎,2017;渡邊・池崎,2020)からも、ミシン縫いにおける有用性をどこに位置づけるのかが問われているように思われた。

大学生の被服製作に対する意識と自己効力感について、扇澤,川端(2009)は、被服製作に対する好き・嫌いが製作への肯定感・否定感と関連すること、加えて、自己効力感が高く被服製作が好きと回答した群は学習が楽しいと感じる一方、自己効力感が低く被服製作が嫌いな群には課題を易しくして苦手意識をもたせない配慮が必要だとまとめた。

そこで本研究では、衣生活の授業を検討する前の2年次生を対象に、製作学習に対する意識・体験、学習動機等についての意識、自作経験について、自己効力感との関連からミシン製作における有用感を検討することを目的とした。

## 2 研究方法

### (1)調査方法

質問項目として、①自己効力感の測定方法として成田,下仲ら(1995)が明らかにしたSelf-Efficacy尺度(以下、SE尺度)から抽出した10項目、②小・中・高等学校時代に取り組んだ被服製作体験についての15項目、③市川(1995)の学習動機尺度を参考にした10項目、④自作経験の4つを設定した質問紙調査を実施した。

### (2)調査対象者・調査時期

調査対象者は「初等家庭科教育法」受講者18名、調査時期は2021年10月である。

## 3 結果と考察

先行研究で示された「自己効力感が高いほど被服製作学習に対しても肯定的で、学習や生活での実践に取り組む意欲が高い」と同様の傾向が確認できた。

一方、先行研究とは異なる傾向として、自己効力感がそれほど高くないとしても、製作学習で獲得できる力、役立ち感を自覚し、作品を大切にしたい気持ちなどに肯定的な姿勢を示していることが明らかとなった。また、学習に対する前向きな姿勢、友人との協働活動のなかで新たな可能性が切り拓かれる実感を得たいという意識も確認することができた。加えて、製作の取りかかり段階で抱く不安、苦手意識などが製作途中で変容している可能性や、被服製作において学習者がエンパワメントされ、活動の持続性を保つ上で「誰かの頑張り」の影響は受けにくいこと、さらに、ミシン縫い学習における有用感、知識と技能を習得し作品を完成させることで得られる達成感・充実感だけで生まれるものではないことも示唆された。

家庭科における家族学習の実施状況の検討－島根県の中学校の家庭科教員への意識調査を通して－

○鎌野 育代 島根大学教育学部

### 1 目的

近年の急激な社会の変化に伴い、私たちを取り巻く家族もまた大きく変化している。この変化を受け、家族を学習の対象とする家庭科では、学習指導要領においてその位置づけは重要視される傾向にある。片田江(2011)は、「家族ぐるみ」や「地域ぐるみ」といったものが生活から失われつつあることを受け、「学校ぐるみ」によってかつて家庭や地域が果たしていた役割を担う必要性を述べ、その中でも家庭科の家族・家庭・地域の学習が中心的役割を担うものとしている。一方、家族に関する授業の難しさについては多くの論文や分析からも指摘されている。

そこで、本研究では実際に家族に関する授業を担当している家庭科の教員を調査の対象として、家族の授業の実施状況や家族学習に対する課題意識などを明らかにすることを目的とする。

### 2 研究の方法

アンケートについては、伊藤(2017)を参考に修正をしたものを使用し、島根県内の公立中学校・高等学校の家庭科教員を対象として実施した。具体的な質問項目は以下のとおりである。

調査時期：2021年3月～4月

調査方法：質問紙法（郵送による配布及び回収）

調査対象：島根県内の中学校（50校）の家庭科教員

質問項目：①回答者の属性 ②授業への取り組み意識 ③授業の実施状況 ④授業で使っている教材 ⑤授業に関する意見や工夫点

### 3 結果

家族学習の授業への積極的な取り組みについては、76%の教員が「あてはまる」「やや当てはまる」と回答していた。授業の実施については、9割以上が家族に関する授業を実施しており、授業数に関しては、6時間以上の実施が一番多かった。また、利用している教材については、ロールプレイングが29名、新聞・雑誌の記事が20名、漫画が10名という結果であった。次に、記述内容の結果としては「家庭科教員の減少による負担」と「プライバシーに関すること」という2点が挙げられる。一つ目については、複数校兼務の教員や、免許外申請を行っている教員が多く見られたことである。二つ目については、家族の多様化により、生徒一人一人に落としこむことの難しさを読み取ることができた。加えて、この回答した44校の家庭科教員のうち、18校の教員が同じような回答を記述しており、これまでの研究の結果と同様に、家族の学習におけるプライバシーの問題は大きな課題であるといえる。

#### 【引用文献】

伊藤葉子. (2017). 中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討. 日本家政学会誌. Vol.58. No.6. p315-326.

片田江綾子. (2011). 6章 家族・家庭・地域の授業づくり. 中間美沙子/多々納道子(編). 中学校・高等学校家庭科指導法 (pp97-114) 東京: 建帛社

○井澤 妃那 山口大学教育学部  
西尾 幸一郎 山口大学教育学部

### 1 目的

『高等学校学習指導要領 家庭編』では、学習内容の「B 衣食住の生活の自立と設計 (3) 住生活と住環境」において「生活行為と住居、ライフスタイルと住まいの関係などを取り上げ、一人暮らしや家族と住む住宅の間取り図等を理解する。」を扱うことになった。しかし、現行の家庭科教科書ではいくつかの住宅の間取り図が掲載されているのみであり、生徒が空間や暮らしを立体的にイメージしながら、間取りを作成できるような教材はあまりみられない。そこで、本研究では、高性能でありながら容易に操作をすることができ、且つフリーでも使用することのできる Planner5D という間取り作成ソフトを用いた授業実践を行い、その教育的な効果を検証することとした。

### 2 方法

対象者は、公立 Y 高等学校の 2 年生クラスの生徒 34 名 (男子 2 名、女子 32 名) である。2021 年 11 月に高等学校家庭科の題材「物と収納の管理 (全 2 時間計画)」について Planner5D を用いた授業実践を行った。教育的な効果を検証するために、本時の開始 1 週間前と終了 1 週間後にアンケート調査を行った。調査項目は、部屋づくりに関する意識や態度 (7 項目)、整理整頓に関する意識や態度 (7 項目)、ゴミの分類に関する知識や技能 (7 項目) であり、いずれも 5 件法で回答を求めた。

### 3 結果

対応のある t 検定の結果、部屋づくりに関する意識や態度では「部屋が散らかっていることはかっこ悪い (3.88→4.08)」と「1 人暮らしをしたときに部屋の大きさや住み方に合わせて、適切な家具を選ぶことができる (3.84→4.46)」の 2 項目で有意差がみられた。整理整頓に関する意識や態度では、「整理と収納のそれぞれの言葉の意味の違いを説明できる」の 1 項目で有意差がみられた。ゴミの分類に関する知識や技能では、「ゴミの種類ごとに家の中や敷地内での置き場が決まっている」「自分が一人暮らしをした時に出るごみの種類や量が分かる」「ゴミの種類や量、部屋のインテリアに合わせて、適切なゴミ箱を選ぶことができる」の 3 項目で有意差がみられた。上記のような成果が得られた要因としては、生徒が Planner5D を用いることで、空間や暮らしを立体的にイメージし、部屋の使い方を考えながら模様替えをしたことが関係していると考えられる。

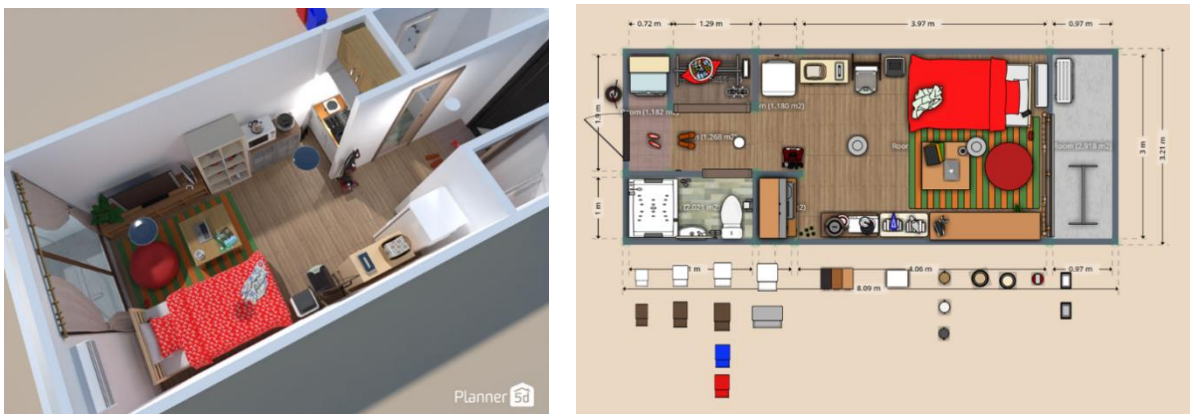


図 1 Planner5D を用いて作成した住教材

小学校家庭科と異文化理解教育を関連付けた授業実践とその効果  
－日本とカナダをつなぐ遠隔教育の事例より－

○立石 生羽 山口大学教育学部  
西尾 幸一郎 山口大学教育学部

## 1 目的

2018年の小学校学習指導要領の改正により、グローバルな視野で活躍するために必要な資質・能力の育成や、教科横断的な取り組みがより一層求められるようになった。また、2021年の文部科学省答申(『令和の日本型学校教育』の構築を目指して)において、現職教員には、子どもたちの発達の段階に応じて、対面指導と遠隔・オンライン教育とのハイブリッド化による指導の充実が求められている。家庭科教育の分野では、神田ら(2015)による先駆的な教育実践もみられるが、まだ萌芽段階にあり、今後、さらに多くの実践を積み重ねて研究成果やノウハウを蓄積していく必要がある。そこで、筆者らは、小学校家庭科と外国語科の授業の一環として、海外とオンラインで接続した異文化理解の教育プログラムを実施し、その教育的な効果について調査・分析をおこなった。

## 2 方法

対象者は、付属A小学校6年生クラスの児童34名である。2021年12月から2022年1月に小学校家庭科の題材「気持ちがつながる家族の時間」と外国語科、学活の時間を活用して異文化理解の教育プログラムを実施した(全5時間計画)。なお、ここではカナダの家庭とオンラインで接続した国際交流も行った。教育的な効果を検証するために、本時の1時間目の直前と5時間目の終了後にアンケート調査を行った。調査項目は、基本的な属性を問う項目に加えて、児童の異文化理解に関する14項目(4件法、国際理解測定尺度から児童の興味関心を問う質問を抽出)であった。

## 3 結果

対応のあるt検定の結果、国際理解測定尺度の外国語に関する下位尺度では「色々な国の言葉を勉強したい(3.3→3.5)」と「英語で手紙を書くことができる(2.3→2.8)」の2項目で有意差がみられた。異文化理解に関する下位尺度では、「外国でその国の人たちと同じような生活ができる(2.4→2.9)」の1項目で有意差がみられた。国際交流に関する下位尺度では、「外国の人が困っていたら声をかけることができる(3.0→3.4)」の1項目で有意差がみられた。また、授業での児童の様子や発話から日本とカナダの生活や習慣、行事などの違いを知り、多様な考え方があることに気付く機会にもなったことが推察された。上記から、外国語科の教育目標を達成する上で、本実践は有効であったと考えられる。ただし、家庭科の目標である「日本の生活文化の大切さに気付くことができる」に関しては、十分に達成できなかった。今後、授業の展開や課題の内容などでさらに工夫する必要があると考える。



図1 授業の様子

## 1 目的

2020年代の教育の目標として示された「令和の日本型教育(中央教育審議会答申令和3年1月26日)」では「個別最適な学び」の充実により子どもたちの「自ら学びを調整しながら粘り強く学習に取り組む主体的な態度」を育成することが必要であるとしている。そのために「指導の個別化」と「学習の個性化」の重要性も明示されているが、技術・家庭科(家庭分野)では教員の一人配置や複数校かけもち、実習準備の負担や学校現場における慢性的な多忙など多くの課題があり、個に応じた多様な教材の提供や授業時間内に生徒一人一人にきめ細かな指導を行うには困難な状況がある。その結果、「布を用いた製作」の学習では市販のキット教材を用い、一斉指導による授業を行っている学校が少なくない。

生徒がより主体的に「布を用いた製作」に取り組むためには、生徒が興味・関心を持ち、作ってみたいと思えるようなものであること、生徒の技能レベルに適したものであり、それぞれのペースで最後まで粘り強く取り組めるものであることと、それを可能にする教師の支援が必要である。

そこで、「個別最適な学び」に必要な環境整備の一環として導入された生徒一人1台のタブレット端末を活用し、地域で生産されている畳縁を用いて「布を用いた製作」の授業を行いたいと考えた。畳縁は古くから市内で生産されており、また、身近な日本の伝統文化でありながら現代の生活に合わせてその利用方法が工夫されていること、総合的な学習の時間に学習したSDGsとも深く関わることなどから、生徒が興味・関心を持ちやすいのではないかと考えたからである。

## 2 方法

製作するものは実用的で誰もが使用し、小学校で習得した技能に加えて、ファスナー付けという多くの生徒が未経験の技能を必要とするペンケースを選んだ。

製作に対して苦手意識を持っている生徒が自分のペースで余裕を持って製作できると同時に、得意とする生徒も満足感や達成感を味わえるよう、一人1台のタブレット端末を活用して、生徒が自分の好みや技能の習得状況に応じて個別に取り組むことができるように資料を作成した。

製作するペンケースは最も簡単な基本の形に加え、各自の技能や好みに応じたアレンジの方法を示した。色や柄は10種類程度の中から選択できるようにしたほか、布の裏表を替えて使用したり、布を友だちと交換したりすることにより、様々なデザインのもを工夫して作ることも可能とし、製作方法も手縫い、ミシン縫い、又は併用を生徒それぞれに選択させた。(製作の途中で変更も可能とする)

授業では共通する部分を一斉指導で行い、生徒が個々にタブレット端末を見ながら製作できる資料を配付した。既習事項である基礎縫いやミシンの扱い方についても、必要な場合のみ確認できるよう、動画集を作成し、配付した。

授業後はアンケートにより生徒の感想や意見を聞き、成果と課題を検討した。

## 3 結果

デザインを考える際にはそれぞれに目標を設定し、技能レベルを考慮して形を選んだり、自分のペースで主体的に製作する生徒の姿が見られた。さらにタブレット端末を積極的に活用するだけでなく、生徒同士で教え合うという、教師が想定していなかった「学び方も主体的に選択する」という様子が見られた。

授業後のアンケートからは地域の素材を扱ったことで地域に関心を持ち、製作への意欲が高まったことがうかがえたが、生徒が自分の技能レベルに応じて適切にデザインを選択することができていたかどうかは不明である。また、タブレット端末の効果的な使用方法についても、更に検討が必要である。